

東京大学合格

麗澤瑞浪は年々進路実績も向上し、昨年度は川島桜也君が東京大学（理2）に見事に合格しました。また、名古屋大学（医学部）に2人、

大阪大学に2人、横浜国立大学など難関国立大学に多くの現役合格者を出しました。東京大学にはここ5年間で現役生3人、浪人生1人が合格しましたが、川島君のように塾に通わず、寮生活を通してしっかりと力を付けられたのは、共に励まし合える良き仲間や、どんな質問にも真摯に受け止める先生方、勉強や学校生活に打ち込める良い環境と、まさに廣池千英先生が言われる「3本柱」があるからだと思います。

今こそ寮生活

昭和35年に開校してから平成7年までは全寮制として、平成8年から通学制を導入して今日に至っています。今ではバス路線も増え地元からの評判も高まり、寮生と通学生の比率が6対4になっています。

親元にて何でもやってもらえていた生活から、突然、瑞浪の山の中での寮生活に飛び込むにはどうして

も勇気がいることかもしれません。しかし、あえて中高時代に、親元を離れて寮生活をするということは、ほかの何にも代えられない得難いものがあると思います。

今回は現6年生の藤田奈々さんが、昨年の寮内生徒体験発表会で発表した作文を紹介します。

「キラキラ」

B4寮 藤田 奈々

中学の頃から思い描いていた高校生活はいっだってキラキラしていた。

中学3年生の時に兄の高校の文化祭に行つて以来、高校生に憧れを抱いていた。賑わう模擬店や屋外ライブ、目に飛び込んでくるものすべてがキラキラして見えた。それをきっかけに、私は必死で勉強に食らいついた。早いうちから志望校も決め、



右から3人目が藤田さん

寝る間も惜しんで毎日勉強し続けた。滑り止めの私立などは、実際どうでもよかった。麗高卒業の母の勧めと、寮に少し関心を持ったことが

ら、私立の受験は麗澤瑞浪に決めた。受験前日に来たセンターも学校自体も初めてだった。センターに着いた夜、先生に頼んで寮内を見学させてもらった。

案内してくれた寮長さんの話す姿や、着ていたトレーナー、メッセージ、急な見学の申し出を快く引き受けてくださった先生方。麗澤瑞浪へ初めて来た夜のほんの数十分の出来事が私の心を動かした。

受験を終えて、家に向かう電車の中で、私は悩んでいた。麗澤瑞浪へ行きたいという思いが自分の中でも大きくなっていったからだ。両親にも相談して、自分でもいろんなことを考えた。その結果、私は麗澤瑞浪へ行くことを決めた。

寮生活自体に不安はあまりなく、入寮する前も入寮してからそれは変わらなかった。初めての寮生活は不安というより新鮮で毎日が楽しかった。

「早く寮に戻りたい」などつぶやきながら過ごしていた初めての家庭学習はあつという間に終わり、夏の2回目の帰省の時の事だった。久々に再会した中学の頃の友達



通学生も寮生も仲良く野外昼食会

が、慣れた手つきで携帯を操作して、たくさん写真を見せてくれた。制服で撮ったプリクラや、帰り道に食べたクレープの写真、クラスでの打ち上げの様子。中3の時に必死に食らいついた勉強の先に待っていたはずの高校生活がそこには広がっていた。寮に入ることを決めて自ら手放

したのはそんなキラキラした高校生活だった。それからは、寮生活を送る自分が悔しくて、寮に入った事を後悔するようになった。けれど、帰寮日にはちゃんと帰寮し、人前で愚痴をこぼすこともしなかった。そうして気付けば、今まで通りに毎日を過ごしていた。気付けば、いつでも仲間がそばで笑っていた。気付けば、寮に入つて良かったと思うようになっていた。

制服を着くずしたりできないし、プリクラみたいにかわいくは写らない。それでもデジカメに写



新入生、入寮おめでとう

親子2代で学ぶ

19期 三國 宏子(旧姓 河村)

高校を卒業して昨年30年という月日がたちました。3人の娘たちも麗澤瑞浪にお世話になる事ができ、長女は2年前に、



として今春次女が卒業させていただき、現在は高校2年に在学する三女の保護者として母校に来させていただいております。私自身、卒業後はなかなか母校を訪れる機会もありませんでしたが、こうして保護者として足を運べることを大変嬉しく思っています。30年たった今も、屏風山麓に広がる大自然、懐かしい校舎や寮など、学園の景色が変わらずあたたかく迎えてくれます。全寮制だった頃の女子寮もそのまま、私が3年間過ごしたEブロック(現在はB寮)で、我が子が寮生活させていただけるということは本当に感慨深いものです。集会室には歴代の寮生の集合写真が今も飾ってあります。セピア色になった昔の写真を見ると、楽しかった事や辛かった事など当時の記憶がよみがえってきて、本当に懐かしい気持ちになります。

そんな懐かしさいっぱいの子女子寮が老朽化や時代の流れ等もあり、男子寮と同じく個室が変わることとなり、現在工事が進められています。卒業生としては寂しい気持ちもありますが、麗澤教育の精神が根付いた寮が、形態は変わっても、また世代が変わっても伝統が受け継がれることを願わずにはられません。

今年度、廣池理事長は「累代教育」が大切であるとおっしゃっています。私自身、寮生活を経験した父の勧めで麗澤瑞浪高校に入りました。そして親の立場になって改めて両親の気持ちに思いを馳せるようになり、子供が親元を離れて寮生活をする事で更に両親への感謝の心が深くなりました。ここ麗澤瑞浪で貴重な寮生活を体験した娘たちにとっても、ここでの体験がかけがえのない財産になると信じています。そして将来、自分が親になった時に次の世代に繋げてほしい、と願っています。



寮行事で焼肉パーティー

寮生活のたわいない一瞬一瞬がキラキラの一つで、私たちは毎日、溢れるような輝きの中で生活している。その輝きは、社会に出

れば強みとなり、時がたてば、思い出となつていつまでも私の一番の財産であり続けるだろう。憧れていたものとは少し違ったけれど、それ以上のキラキラを与えてくれたここでの寮生活は、早くも2年目を迎えている。去年の夏以来、寮に入ったことを後悔した日はない。私は麗澤瑞浪に来て、憧れの一つを実現できた。ここでのキラキラした高校生活はきつと、当時中学生だった頃の自分が憧れたものよりも輝



ようこそ中学女子寮へ

キラキラした高校生活は幸せの中にある。そして、幸せの基準は私たち自身にある。その基準を下げれば下げるほど、幸せは手に入れやすくなる。特別なことではないけれど、幸せを感じることができたから濃い

時間が生まれた。キラキラを実現する事ができた。幸せを手に入れるには、まず、目の前の小さな幸せと向き合っていく事。この事を教えてくれたのも、キラキラを実現させてくれたのもここでの寮生活である。

彼女の言うように、麗澤瑞浪の寮生活には「キラキラ」や「幸せ」がたくさんあります。便利で何一つ不自由のない生活からでは味わえないような幸せを、今こそ麗澤瑞浪の寮生活で味わってほしいと願っています。

れいだい

戸田昌幸先生特別講演会



平成26年3月8日、今年度で麗澤大学を退職なさる戸田昌幸先生を講師にお招きして、日本語専攻の在学生と卒業生が集まったの特別講演会を開催しました。

講演会はとても盛り上がり、質疑も含めて予定の時間をオーバー。その後、場所を南柏駅前の居酒屋に移して、懇親会を行いました。在校生と卒業生が一堂に会するまれな機会であり、両者の交流もあちこちで見られ、大変有意義な会でした。「今後もぜひ、ただの専攻の同窓会というのではなく、在校生も交えた『縦』のつながりのある企画を期待する」といった声も聞かれ、盛会のうちに終わりました。

れいこう

卒業30年目のホームカミング

(47期)

「やばい」と思った。が、時すでに遅し。

涙腺は崩壊、しかも笑いながら。肩を組んだ友人たちを見渡すと、彼らも笑顔だが瞳は潤んでいた。3月3日、卒業記念会食で「暁鐘」を大合唱した時の出来事である。卒業30年目のホームカミングデーに招待していたのだ。我々47期は、前日の同窓会に52名、卒業式に36名が参加した。なぜ涙が溢れたのだろうか。これまで同窓会で学園に来たことはあったが、この30年間は麗澤からもモラロジーカーも遠ざかっていた。47期代表の福田哲也君の卒業生への祝辞の中にその答えがあった。なぜ今日ここ麗澤に帰ってきたのか？ それは「心のよりどころがここにあるから」「寝食を共にした仲間と先生方がいるから」だと。

実はあの日以来「あまロス」ならぬ「麗ロス症候群」。フェイスブックに張り付き仕事の手につかない日も多い。今もこうして文章を書くために暁鐘大合唱の映像を見ていると、ほらまた涙腺が……。(藤田義之・記)



「あまロス」ならぬ「麗ロス症候群」。フェイスブックに張り付き仕事の手につかない日も多い。今もこうして文章を書くために暁鐘大合唱の映像を見ていると、ほらまた涙腺が……。(藤田義之・記)

みざいこう

卒業30周年の同窓会

3月1日、私たち20期生は卒業30年の記念

に母校の卒業式・記念会食に招待を受け、久しぶりに瑞浪に集まりました。当日は土曜日で休日だったため、宮城県や四国からの参加もあり、総勢46人(うち定時制卒業が7人)と大勢の参加となりました。

記念会食では、一転、アットホームな雰囲気、30年前と全く変わらない会食でした。驚いたことに現職の古屋大臣(地元出身)もお祝いに駆けつけ、『麗澤瑞浪の卒業記念会食はギネス記録の価値がある!』とのあいさつで会場が盛り上がりました。

夜は多治見市に会場を移して同窓会を行いました。同窓会からの参加者もいて、総勢70人ほどの宴会となりました。お酒の力も借りて、気分はすっかり高校時代。当時の暴露話から、近況報告まで話は尽きませんでした。驚いたことは、卒業式に参加した46人のうち、15人が子どもを麗澤に預け、保護者として母校に帰ってきているということでした。ここでも麗澤の絆を感じました。

30年ぶりでしたが、変わらない仲間と再会でき、本当に楽しい一日となりました。このような機会を与えてくださった学校関係者の皆さま、そして案内発送から当日の進行まで段取りをしてくれた幹事の渡辺君、本当にありがとうございました。20期ばんざーい!!

(河村三郎・記)

